

# フィールドワークにおけるコミュニケーションについて - モンゴルでの事例 -

青井 美穂子  
北九州大学文学部人間関係学科

## 要旨

私は卒業論文のテーマ探しも含めて、約一ヶ月間モンゴル国にいた。言葉の壁に阻まれて、私は相手と一見無駄に見えるコミュニケーションをとることよりも、モンゴルの文化や人について知することに重きをおいた。そしてついに彼らのやり方をまねることで彼らとコミュニケーションを図ろうとした。

一方私が出会ったモンゴル人達は、私には無駄に思えるコミュニケーションを行っていた。私は彼らのこのやり方では、知りたい情報を得ることができないと判断し、彼らのコミュニケーションのやり方を軽視していた。

こうしたやり方をとった私と彼らとの間にはコミュニケーションの齟齬が様々様々なところで起こった。同時に互いが相手とわかりあえていると「共感した雰囲気」があることもあった。

本稿では、そのコミュニケーションの齟齬について事例を検証していくとともに、同じ空間を人と共有する時、必要なものはなんであるかについて考えたい。

事例を通してみると、良好な関係が築かれているのはまさに情報を得るという観点からすれば、無駄なコミュニケーションの中にある。そしてこのコミュニケーションが良好な雰囲気をつくりだすことができたのは、「共有」するものが何かそこにあったからである。

こうしたコミュニケーションにおける一見無駄に思えるものの有用性、そして「共有」する何かを見つけ出すことの重要性を次にフィールドに向かう者が認識し、「共感した雰囲気」の次の段階である「理解しあうこと」について検討されることが課題であろう。

## 目次

はじめに	
第1章 モンゴルについて	
1-1 地域概念	
1-2 遊牧民について	
第2章 事例	
2-1 ブルネイとセンク	
2-2 ブルネイの兄	
2-3 オコンバット	
2-4 チェデウ	
2-5 「イムウ？イムウ？」	
2-6 石探し	
第3章 考察	
謝辞	

はじめに

モンゴル国の首都ウランバートルから南

へ約 600 キロ、ウムヌ・ゴビ県都ダランザトガト市がある。そこから東に約 50 キロ行った場所にある緩やかな丘の上に、パボ

ー（69歳・夫）とチェデウ（66歳・妻）のゲル（移動式住居・中国語でパオ）はある。1999年8月18日から9月16日のモンゴル国滞在期間中、8月22日から9月13日の約3週間、私はこのバボー・チェデウ夫妻のゲルで生活した。

夫婦のゲルはモンゴル国総面積の27%を占める砂漠性ステップのゴビ（吉田、1993）にあり、砂礫性の大地にフムス（野生のユリ科ネギ属、ニラの風味がする）と呼ばれる丈の短い草が点々と生えている。

ゲルの西にはゴロウン・サイハン・オール（3つの美しい山）と呼ばれる山々が連なり、夜になるとそのふもとと辺りにあるダランザトガト市の町明かりがうっすらと見える。ゴロウン・サイハンオールと並んで南側にはハン・オール（王の山）と呼ばれる昔活火山だったという山が見える。ゲルから南へ歩いて15分行った所にはタランザトガト市へと続く電柱が南東から北西へと伸びており、そこから更に南東に100キロ以上離れた所にイフ・オール（たくさんの山）と呼ばれる山々が見える。北東には赤い山々のように見える丘陵地がある。この方角へ進んで行くと乾燥度が高くなってゆき、それにあわせた植生が見られる。

バボーとチェデウのアイル（世帯もしくは家族）では、ヤギとヒツジの混合した群を飼っており、朝ヤギの搾乳の後放牧に出し、夕方群をゲルの側まで連れ戻してヤギの搾乳を行うのが日課である。夫妻には6人の子供があるが、皆既に結婚して別の家を構えており、このアイルはバボー（夫）、チェデウ（妻）の2人きりである。

ゲルには風力での自家発電装置があり、

ゲルの天井の骨組みであるオニから裸電球を一つぶら下げており、夜の灯りとして利用するのだが、度々故障するのでろうそくを主に使っている。水はバイクの荷台に蓋つきのバケツを括り付け、そのままバイクで10分ほど行った所にある井戸でバケツに汲み、再びバイクに括り付けて持ち帰る。

ゴビに住む人は「ゴビは豊かな大地」だと誇らしげに言う。草はまばらだが、フムスのようなビタミン豊富な種類の草が多く、その草一本一本に栄養が凝縮しているため、それを食べたヒツジの肉は香ばしくて味がいいのだと言う（鯉淵、1993）。

さて、以上が私の調査地にしようとした所であるが、本論の舞台は必ずしも上記の場所ではない。私がモンゴルに滞在したことから見えてきた事は、上記の場には収まりきれないものであった。それはフィールドワーカーとしてフィールドに関わる時の問題である。

私はモンゴルに赴くにあたって、何かについて調べるということをせず、フィールドに行けば「何かしら面白いもの」が見つかるであろうという可能性に賭けていた。私はただ漠然と「何かしら面白いもの」を知ろうとしていた。それがいったいどの様なものであるか見当もつかなかったが、現地で生活する中で見つけ出せるだろうと思っていた。

しかし私には、モンゴル語がよくわからない状態で題材を見つけ出し、何かを書かなければならないということと、現地での滞在期間が確定されているという制限があった。私は「何かしら面白いもの」が現われるのを気長に待つことができず、目に

いたものを「面白いもの」と成りうるか否かどうかで判断した。焦りが生じると物事をありのままに捉える余裕がなくなり、本質が見えにくくなる。

相手の文化について何かを知ろうとすることは、相手をわかろうとすることであり、異文化の人間とのコミュニケーションにおいて重要な要素の一つであろう。自らの文化をわかろうとしている人間に対して嫌な顔をする者があるだろうか。私は自らの知ろうとしていることが、相手をわかろうとして行っていることなのだから、相手に理解してもらえらるだろうと思った。そして更に、知ろうとすることは私がモンゴルにいる存在意義であり、相手に要求するものとして正当なものであるという錯覚に陥った。これは自らの判断の世界に閉じてしまうことであり、相手の判断の可能性について配慮が失われている。盲目的に知ろうとすることは、相互理解への可能性をも失ってしまう。

私が知るということに焦り、余裕のない状態であった時、私はモンゴルの人々と様々なコミュニケーションの齟齬を引き起こした。本来ならば、異文化の人間とのコミュニケーションを成功させ、文化についての記述に移るところであろうが、私はその記述の段階に達する前の段階で躓いた。相手の文化について知ることは、本来は相手と自分とが通じあえているような、共感した場面において可能なものであろう。私は互いが相手についてまだよく知らず、緊張した場面において、知るということを持ち出した。

本稿では、そのコミュニケーションの躓

きについて事例を通して見ていくとともに、その逆にコミュニケーションが円滑に運び、互いの間に通じ合っているような共感した場が生じた時についても触れることで、フェイルドワーカーとしてその場にいるには何が必要なのかを検証していきたい。

## 第1章 モンゴルについて

### 1 - 1 地域概念

モンゴル国は総面積約 156 万平方キロメートル（日本の約 4 倍）、世界第 17 位の広大な国土に人口約 242 万人が住む。1 平方キロメートルあたり約 1.5 人と非常に人口密度が低い。

モンゴルは内陸部であり高地に位置するため、乾燥とともに気温差が激しい。鯉淵によると最も暑い所では 40 を超えることがあるというのだが、モンゴル国全域で見ると年平均気温は氷点下 2.9 と比較的寒冷である（鯉淵、1993）。モンゴル南部にあるウムヌ・ゴビ県都ダランザドガド市の1月の平均気温は零下 15.4 にとどまるものの、北部ないし山岳地帯の年間最低気温は零下 50 を優に記録する。海拔約 1300 メートルの首都ウランバートルでは最高気温は7月平均の 17、最低気温は1月平均の零下 26 である。その較差は 40 を上回る（青木、1993）。

年間降水量は全国平均で 200 ミリと極端に少ない。日本ではただ一度の雨で 200 ミリを越すこともあるのに比べれば、モンゴルの降水量がいかに少ないかがわかる。降水量の多い地方でも 400 ミリ、少ない地方

になると年間 50～80 ミリに満たない（鯉淵、1993）。

乾地農業が行われているパキスタンでの年降水量が 300～500 ミリと言われている（小貫、1993）。モンゴルの降水量は明らかにそれを下回る。こうした気候や土壌などの諸条件に最適な生業は遊牧である。

## 1 - 2 遊牧民について

遊牧の起原について、梅棹はステップに適応して進化を遂げてきた群居性有蹄類の群が彷徨するにつきしたがって、狩猟民が移動するところに遊牧的移動生活が始まったとしている（梅棹、1990）。有蹄類動物群は食べるための草が豊富にあってもどんどん移動していく。人間は搾乳と去勢という画期的な技術を媒介として、この動物群と共生関係をむすび、遊牧民となったのではないかということである。家畜が草を食べるという行動を家畜の移動の習性に任せるとするのは、人間が家畜に食べ物を用意するよりもはるかに経済的で、合理的な方法である。

モンゴルでは広大な国土の約 8 割に相当する 1 億 2400 万ヘクタールが、牧地として利用されている（青木、1993）。この大平原にぼつんとたたずむ遊牧民のゲルに立ち寄ると、彼らは訪問者に飲み物や食べ物などを出して迎え入れる。時には見ず知らずの者を一晚泊めることもある。ゲルの扉には鍵などなく、訪問者はゲルに人がおらずとも気軽にゲルに入って乳茶などを頂くことが許されている。

「モンゴル人においてはただむしように

客好きで - 人間は人間が娯楽だということをしみじみ感じさせる - （中略）おのれのゲルにも泊まってくれないかな、という無邪気な欲求が一般にある（司馬、1974）。」

モンゴルにも様々な娯楽は存在するが、この「人間は人間が娯楽だ」という指摘は非常に示唆的である。人口密度の高い国に住んでいると見過ごしてしまいがちだが、人とコミュニケーションを取ることこそが、最高の娯楽なのである。

モンゴルで子供達に出会うと、はじめ彼らは大人の背に隠れたりして、恥ずかしそうに遠巻きにしているが、慣れると次々に色々なことを尋ね、遊びを仕掛けてくる。モンゴル人々は人見知りはしても、根は人間が好きなのである。

## 第 2 章 事例

### 2 - 1 ブルネイとセンク（注 1）

私がモンゴルの首都ウランバートルに列車で到着した時、ブルネイ（夫）とセンク（妻）が迎えに来てくれる予定であった。私は列車から降りると、2 人を探すと同時に、出会ったら、「サインバエノー（こんにちは）」とモンゴル語で挨拶するつもりで意気込んでいた。

初めに会ったのはセンクであった。私が彼女に声をかけようとしたその時、センクは私に気づいて、「こんにちは」と日本語で挨拶した。私は拍子抜けして「こんにちは」と日本語で挨拶した。

それからセンクは自分の名前、「今日は雨です」などをカタコトの日本語で話した。

しかし私が「ウランバトルはいつもこんな大粒の雨が降るのですか？」と尋ねると、わからないという表情で首を振った。

センクは私がモンゴル語を話せないと聞いて、急遽2週間前に日本語の勉強を始めていた。そのため難しい日本語はわからなかったが、簡単な意思疎通は日本語で可能であった。

しかし、センクの話す日本語は、私に対して何かを尋ねるといよりは、彼女の持つ何らかの情報を私に伝えるという意味合いが強かった。例えば、ウランバトルではガソリンが不足しているという話や、食事などについて話した。それは私にとって「はい」「いいえ」か、首を振ることで済ますことのできるものであり、会話というよりは、情報の伝達であり、少し味気ないものであった。

センクの話す日本語が会話になり得なかった理由の一つとしては、彼女の日本語習得への契機が、日本語の話せない私に彼女たちが手配したことについて伝えなければならないという、伝達の必要性から生まれたからであると考えられる。つまり私達のコミュニケーションは、初対面であって相手を知ることから始まるのではなく、まず、情報を伝達するところから始まったのである。それは情報の発信者と受信者という役割分担が定められていたのだとも言える。

センクが何かを言うと、私がそれにうなずいてかえす。センクはゆっくりと次の言葉を探す。そして、次の言葉が出されると、私はまたそれにうなずく。センクは再び沈黙し、次の言葉を探す。

私はうなずくことで自らの役割を忠実に果たしていた。一方のセンクは時々その沈黙に苛立ったかのようにその場を離れることがあった。彼女の苛立ちが彼女自身が思うように日本語を話せない為であるのか、うなずくだけの私に対してのものであるかはわからなかった。しかし、センクの日本語習得への覚悟のようなものを考えると、その苛立ちが彼女自身に向けられたものであると当時の私には思われた。

センクは日本語の勉強に利用した本やノートを持っていたが、話している最中にそれを見て確認することはなかった。自分の頭で記憶できていない言葉は、調べればわかる言葉であっても、わからない言葉だという言語習得への覚悟のようなものがセンクにはあるようだった。私が話した言葉がわからない時は間髪おかずに日本語で「わかりません」と即答した。

自分が記憶できていない言葉は分からない言葉だと即断する厳しさは、何度も覚えようとした言葉が覚えられない際には、そうした自分を厳しく批判することとなるだろう。

しかし、ここで当時の私が選ばなかった選択肢、彼女の苛立ちが私に対して向けられていたと考えるとどうだろうか。情報の発信者と受信者という固定的な関係では、互いをわかりあうというコミュニケーションの醍醐味は失われてしまう。センクは日本語の限界はあるものの、私と固定的でないコミュニケーションを求めていたとしたら、うなずくだけの私の態度は、彼女に苛立ちと諦めをもたらすだろう。

私は自らのやっていることは、センクの

言葉が伝達でしかないせいだと考え、彼女がそういった言葉しか話せない以上、私達はその固定的関係からは抜け出せないのだと諦めていた。しかし、情報を受信するだけのうなずきがいかに自分にとって安易な方法であるかを考えていなかった。

情報を伝える者と受け取るものとは、そこに大きな隔たりがある。伝える者はこの言葉で相手に伝わるのだろうかという不安を抱えながら、勇気をもって相手に伝えなければならない。受け取る者はその言葉で自分が理解できるかどうかを考えるだけで、伝える者のように他者を意識して苦しむことはない。

そうしてみると、私のうなずきは自らの世界に閉じこもっていただけで、相手とのコミュニケーションを拒否していたと考えることもできる。こうした私の閉じこもりは語学習得に関しても現われている。

私のモンゴル語のレベルは「これをモンゴル語で何といいますか？」とモンゴル語で尋ねることもできない状態であった。伝達するだけの言葉であっても、話すことのできたセンクに対して、私はその伝達すらままならず、私はまず基礎的な語彙を覚えようと本に向かってばかりいた。しかしそこで目にした言葉がセンクに対して使われることはほとんどなかった。

こうした私の閉じこもりを開く端緒があった。それはブルネイとの次のような出来事である。

ある日、私は朝からずっと出かけていたブルネイとセンクが夕方帰ってきた時、ブルネイに思い切って「サインバエノー（こんにちは）」と挨拶した。ブルネイは驚きの

声の後、私の肩を叩きながら笑顔で「サインバエノー」と返事をした。そしてそばにいたセンクに私がモンゴル語で挨拶したことを笑顔で伝えた。

ブルネイはモンゴル語しか話せず、私はそれが話せないため、彼と言葉を交わす事はほとんどなかった。しかし、私がモンゴル語を少しでも話したことに對して彼が大喜びしてくれた時、そこには互いの間に何かしら通じ合っている場が生じていた。

私は自分とブルネイとが何かしら通じ合っているような場を共有することができて満足するとともに、ただの受け取る側から、勇気を出して何かを伝える側に立ってみようとした試みが成功したことで自信をつけた。私はこのことがあってから、センクにモンゴル語で何度か話し掛けた。

私はそれまでセンクとの固定的な関係を変えようとしなかったが、それは変えたくなかったのではなく、変えることができなかったのである。私はセンクとの関係が情報伝達に始まり、私はその関係を持続させていたのだと述べたが、その持続、つまり私の閉じこもりは情報伝達が原因ではない。情報伝達という私とセンクとの関係は閉じこもりを促進したに過ぎない。

ブルネイとの出来事をきっかけとして私がセンクに何かを伝えるようになったということからわかるのは、私には伝える側に立つきっかけと勇気が必要だったということである。

私とセンクとの出会いの場面をもう一度思い出してみよう。私はセンクにモンゴル語で話し掛けようとして失敗した。私はこの時にセンクとの間で伝える側に立つき

かけと勇気とを失ってしまったのである。

ただ、私とセンクの場合出会いが原因であるとしてもそうしたきっかけは、(ブルネイの出来事が私の意志によって始められていることを考えると)センクと私との固定的関係が持続している時においても成し得たのではないかと考えることもできる。

しかし、ブルネイの場合とセンクの場合とが異なるのは、ブルネイの場合は一度の挑戦で成功しているということである。この挑戦の以前には、互いに言葉が通じないこともあって私とブルネイが向き合うことはなく、いつも私とセンクが向き合っていた。ブルネイが私に話したいことはセンクを経由して私に伝えられた。

つまり、ブルネイは私にとってセンクを介さなければならない存在であり、ブルネイに話し掛けないこと自体も、持続された関係であった。しかし、センクとの関係と異なるのは、ブルネイとの関係において挫折を味わっていないということであった。センクとの関係が私から伝えることの失敗に始まったのに対して、ブルネイはいつもセンクを介していたため失敗も成功もなかった。私が勇気をもってブルネイにモンゴル語を話すことができたのは、失敗を経験していない故の無謀さとも言うようなものが成立する余地があったからなのである。それに対してセンクとの関係は固定的であるものが促進されていくばかりで、そこからの逃れることが私にはできなかった。

私はブルネイとの出来事があったことでやっと固定的な関係を変えようと動き出したのである。私はセンクにモンゴル語で話し掛けた。するとセンクは日本語で答え、

私がモンゴル語で話し掛けたことについてもなら表情をかえることはなかった。

私自身センクから日本語で話しかけられることについて喜んだことはなかった。モンゴルの文化に触れようとしているのに、日本の文化について持ち出されても、うれしくなかったのである。それは日本語を学ぼうとしているセンクも同じ事であるようだった。

私達は互いに相手の言語を話したからといって相手に歓迎されることはなかった。私と彼女は言葉を学んでいるという点では共通していたが、そこから私達の間に互に通じあえているような場は生じてこなかった。センクが日本語で言うことに、私がモンゴル語で返事をする。そこでは互いの思いがすれ違っていた。

一般に、人は自国の言葉を覚えようとしている異言語の人間を、自分のことをわかろうとしているのだと歓迎する。ブルネイが私の挨拶に対して喜んだようにである。私とセンクの場合でも、どちらかが相手の言語力の低さを歓迎で受け入れれば、そこには通じあえているような場が生じたであろう。しかし私とセンクはそれができなかった。

異言語を覚えることは、最終的には異言語の人間である相手のことをわかるために必要であるが、私とセンクは自らの意思、考えを伝えるのが精一杯で、相手との会話により互いを更に理解しあうという段階には達していなかった。そしていつの間にか、目の前にいる相手をわかろうとすることではなく、相手の向こう側にある、相手文化の言葉を覚えることこそが目的となってい

た。伝えるということが相手とわかりあう為に機能しなくなった時、互いが何かを伝えあっても、それは相手に何も伝えようとしていないに等しい。私とセンクとのすれ違いはこの、伝えることのすれ違いによって起きている。

互いが通じあっているような共感した場は、互いがその場を共有しようとする事によって生み出されるのである。

## 2 - 2 ブルネイの兄（注2）

夕食の後、ブルネイとセンクは出かけ、初対面である私とブルネイの兄だけが居間に残された。ブルネイの兄は（以下、兄）モンゴル語で私に話し掛けたが、私はモンゴル語が話せないの、兄も話すことを諦め、TVのチャンネルをニュースに合わせると、それに集中するふりをした。私もTVに集中しているふりをした。互いに相手のことを気にしながらも、どうしたらいいのかわからずにいる気まずい雰囲気だった。

TVでゴビの紹介映像が流れた。TVに映っている動物や山などの名前を、兄はそれぞれを指差してモンゴル語で何と言うかを教えてくれた。私は兄が言う度にその言葉を復唱した。そうすることで自分が興味をもっていることを示そうとしていたのである。しばらくしてニュースは他の政治の話題へと移って行き、また互いに話すことを失ってしまい、気まずい雰囲気が戻ってきた。すると兄はベランダへと私を促した。

ベランダからはアパート群の中庭が見渡せた。もう外はすっかり日が落ちているのに、子供達が月明かりの下、バスケットを

やっていた。一つしかないバスケットのゴールとボールに対して10人近くの子供達がボールを争って奪い合いゴールを決めようとする。その光景を眺めている大人達の姿があちこちのベランダに見受けられた。

しばらく二人でその光景を眺めていたのだが、しばらくして兄はボールをつき、その架空のボールを指差して「ブンブク」と言い、シュートするジェスチャーをしながら、何がしかモンゴル語を告げた。私は2つの単語の組み合わせでバスケットボールという単語を構成していることに納得し、感嘆の声を上げて、兄の動作を真似ながら同じようにモンゴル語の単語を言った。兄はそれを見てそうだそうだという表情をし、またふたりでバスケットを眺めていた。

TVの映像を指し示した時にあった少しぎこちない雰囲気は消え、ボールをつき、シュートするジェスチャーを行うことで互いの間に、リラックスした空気があった。互いの距離が少し縮まって、わかりあっているような共感した場が生じていた。

しばらくしてから、兄は夜空の月を指差し、「サル」と言った。私はうなずいて「サル」と言った。次に兄は星を指差し「オド」と言う。私はまたうなずいて「オド」と言う。それから、兄は中庭に停めてある車を指差して「マシーン」と言った。私は英語で言う所の機械という言葉が、モンゴル語では「車」を示すことが面白くて、なんどか「マシーン？」と確認しては、兄はそうだという風に「マシーン」と答えた。そして車を指差して「ヤボン？」と言う。どうやら日本語でなんと言うのかを尋ねているようである。そこで私は「くるま」と言っ



た。兄は「くるま」という発音を何度か練習した。

そして今度は握りこぶしを私に見せる。図のように、まず親指を立て、私に見せるとそれを元に戻す。そして今度は小指を立て、私に見せると元に戻す。それからまた親指を立て、引っ込めると次は小指を出す。こうした繰り返しを何度かした後に、親指を立てた状態で「ヤボン？」と言う。

親指を小指を交互に出して、引っ込めるということは、親指と小指との対比を意味する。はじめはいったい何を示しているのか迷ったが、日本では親指を小指とを対比させる時、親指は「男」、小指は「女」という意味で使われる。私は兄の親指を指して「おとこ」と言った。

兄には発音しにくい単語のようで、何度か私に発音の確認をする。それからポケットをまさぐると何か書いたくしゃくしゃの紙切れを取り出し、その余白に「車」とその「親指を立てることの意味するもの」を日本語でなんとと言うかを書き留めた。

しばらくバスケットを眺めてから居間に戻ったが、そうしてみると私達はもうすることが残されていなかった。しばらくは居間にいた兄はどこかへ行き、私は一人居間にいて、それ以上は何も話をしなかった。

ここで私と兄とのコミュニケーションについて、兄がモンゴル語の単語を教えてくれたところから考えてみよう。

TVに出てきた動物、山などは指差してできるものであり、具体的な名前である。ここで場所をベランダへと移した。バスケットボールは具体的な名前ではあるが、指差しだけではなくジェスチャーを要するもの

であった。このジェスチャーという言葉でないものを使ったことで、私達の間にはわかりあえているような雰囲気が生じた。

このような雰囲気の中で、兄は月、星とを指差し、その具体的な名前を教えると、次に「車」を指差した。ここでこの具体的な名前を教えた後、初めて日本語を尋ねた。それから親指と小指を交互に立ててみせると、その親指を指差し、日本でなんとと言うかと尋ねた。

それまでは具体的な「名前」を指差していたが、ここでは、親指と小指を交互に立てることによってその対比を示した後に、親指についてのみ言及することで「名前」ではなく、その動作における親指の「呼び名」を尋ねている。「呼び名」はその意味付けの仕方によって変わるものであり、文化的背景による類推を必要とする類のものである。兄は「ヤボン？」と言ったが、ここでは2つの解釈が可能である。

一つは日本における対比を尋ねているということである。日本では前述のように「男」「女」という対比が行われる。

もう一つは、モンゴルにおける対比を日本語で言うとうなるのかを尋ねているということである。モンゴルでは親指と小指を対比させる時に、親指が「よい」を意味し、小指が「わるい」を意味する。パポーとチェデウのゲルでの滞在中、彼らの孫達はこの親指と小指を交互に立てる動作とともに、「いいか？わるいか？」を何度も私に尋ねた。これについても誤解があったのだが、それについては後で触れる。

さてこの2つの内、どちらが兄の尋ねようとしていたことだろうか。私はしばらく

迷ったが、この時はまだ「いいか？わるいか？」を知らず、モンゴルでの意味付けを知らなかったので親指を「おとこ」と答えるしかなかった。

私が「おとこ」だと答えてから、兄は紙切れの余白に「車」と「親指を立てることの意味するもの」を日本語でなんと書くかを書き留めた。書き留めたことで、私達の間にはコミュニケーションが一段落したという雰囲気があった。そして私達はそれ以上話をせず、翌日、を迎えた。

翌日からウムヌ・ゴビ県に着くまで、車が故障するというハプニングがあり、丸一日草原で足止めされた。そのため予定よりも長時間兄と一緒にいたのだが、彼が再び日本語を尋ねることはなかった。

ハプニングが起こった時、時計を持たない兄は時間が気になるのか、私が腕時計をしているのに気づいてからは何度かそれで時間を確認していた。しかし、私がモンゴル語がわからないために声をかけることができないのか、兄は無言で私の腕を指してからその時計の表示を見ることを繰り返していた。

一度、時間の確認をした後、ぶっきらぼうにモンゴル語で数字の1から12までをなんと書くかを教えてくれたことがあった。それは無言で腕時計を見ることに恥じらいを感じ、それを隠すためにしょうがなく話題を持ち出したという感であった。

こうしてみると、兄は日本語ができないが、必ずしも覚えたいと思っているわけではないことがわかる。では、どうして日本語を尋ねたりしたのだろうか。それはその尋ねた単語をそれまでのコミュニケーショ

ンの流れの中で考えてみるとわかる。

はじめはモンゴル語での名前を覚えてもぎこちない雰囲気であったものが、ジェスチャーを通じて変わった。そこでモンゴル語での単語を教えたが、それでは話が終わることができない。

日本語を尋ねる。そうすれば、相手(私)は話に乗ってくるだろう。「車」について尋ね、私が面白がったのを見て、「親指を立てることの意味するもの」についても尋ねてみた。しかし、ここでは間があいてしまった。兄はそこで日本語を書き留めるという行動をとってみせることでもう一度、通じ合っているような場を取り戻そうとした。

話としてはこの書き留めるということで一段落してしまっただが、ここまでの流れで、兄が日本語をコミュニケーションの手段の一つとして利用しているのが見えてくる。

「車」も「親指を立てることの意味するもの」も、その日本語が知りたかった訳ではなく、ただ言ってみただけのことである。書き留めたのも熱心そうに見せるポーズでしかない。だから、「親指を立てることの意味するもの」が前記のどちらに解釈されようと兄にとってはどちらでもよかったのではないだろうか。

私は真剣にどちらであるかを迷った。相手が知ろうとしているのだから、間違っただけを教えるはいけないと思ったからである。また、兄がモンゴル語を覚えてくれているのだと思って、彼の言う言葉を復唱し、覚えようとしていた。

しかし兄にはどちらが正しい答えかということは問題ではなかった。彼がやろうと

していたのは教えたり、教えられたりする  
ことの向こう側にあった。そのやり取りを  
通じて互いの距離を近づけ、互いが通じあ  
えているような場を作ろうとしていたので  
ある。私と彼の間にあったやり取りはその  
為の手段であり、方法であった。

私と兄は同じ場面においても違う局面を見  
ていたのである。

## 2 - 3 オユンバット(注3)

ロシア製の普通乗用車に私とブルネイ・  
センク夫妻、バトバエル・ヒメー夫妻とそ  
の息子であるオユンバット(以下、バット)  
が乗り込んで、私の滞在先であるバポー・  
チェデウ夫妻のゲルへと向かった。しかし、  
この時は誰のどのような世帯で滞在するの  
かをまだ知らなかった。

ウムヌ・ゴビ県都ダランザドガド市から  
東に約 50 キロ行った緩やかな丘の上にそ  
のゲルはあった。中に入ると誰もいなかった  
が、ヒメーは食事を作り始めた。やがて  
出来上がった食事を皆で食べていると、ボ  
ル(夫)とオユン(妻)(注4)そして彼ら  
の赤ん坊がバイクに乗ってやってきた。彼  
らも含めて食事をしながら、人々はモン  
ゴル語で話を始めた。食事が終わり、やが  
て話しも終わると、人々は私とバットを  
残してそれぞれ、車、バイクで去って行  
った。

車でやってきた人々はダランザドガド市  
(アイマク)のある西の方へ。バイクで  
やってきた人々はダランザドガド市とは逆  
方向の東へと去っていった。去る間にオ  
ユンは私に「マルガーシ」帰って来るから  
と言った。「マルガーシ」まではバットとこの

ゲルで待っているようにということだった。

「マルガーシ」とは「明日」であると私  
の本には書いてあった。私は自分の知りた  
いと思っている牧民との生活が多分明日  
になったら可能なのであろうと勝手に思い、  
何もわからないことに不安ではあったが何  
も尋ねなかった。

私はまだどのような牧民と生活すること  
になっているのかわからなかった。また、こ  
の時どうしてオユン達が街とは逆の東の方  
へ行ったのかわからなかったし、どうして  
「明日」まで待たなければならぬのかも  
わからなかった(注5)。

後に「マルガーシ」とは「明日以降」と  
いう曖昧な期間を指すことを知ったが、こ  
の時は「マルガーシ」を正確に「明日」だ  
と思っていた。その為、「明日」になっても  
明後日になっても、人々が帰ってこない時、  
私はいったいどうしたのかと焦った。もち  
ろんこれは誤解なのであるが、この焦りが  
バットとの関係に悪影響を及ぼしていくこ  
とになる。

一晩明けて翌朝、車に乗ってバットの姉  
であるチミグ(注6)16歳がやってきた。  
車に乗っていた他の同乗者達は少し休憩す  
ると、チミグだけを残して去って行った。

昨日人々が去ってしまったからのバット  
は緊張しているのか暗い表情であったが、  
チミグが来てからは表情にいつもの明るさ  
が戻った。ゲルの外では自転車や馬に乗っ  
て遊び、時々ゲルの中に入ってきては私や  
チミグに遊びをしかけて、動き回りじっ  
としていることがなかった。

例えばバットは私の持ち物を次々に手に  
取っては、自分の胸の方に持ってくると、

「mine ( ぼくの物だ ) 」と言って威張って取り上げるふりをした。私はその度に、当然だという風に「mine ( 私の物だ ) 」と言って自分を指差した。

しかしペンを取られた時は、私にとって貴重なものである為、真顔で返してくれと言った。バットは私の表情に余裕がないのを見てとるとすぐにペンを返してくれたが、私を「ボクトーシ」と呼んだ。ケチな奴くらの意味であろう。

バットから「ボクトーシ」と言われれば、私はチミグから教わったあだ名「ナタッドバット」と言い返した。「ナタッドバット」とは、バットが耳の大きい事からつけられたあだ名である。

私とバットはジェスチャーを中心に、対立を楽しむかのように相手がやればやり返すという状態で遊んでいた。顔の表情や声、身振りで遊ぶのは、言葉が通じないからこそ、思いがけない反応が返ってくることもあり楽しいものであった。私とバットは一日の多くをこうした遊びに費やした。チミグはそうした私とバットの遊びを笑っていた。そこには、私とバットだけでなく、第3者であるチミグも巻き込んで、通じあっているような共感した場が生じていた。

しかし、私は日が暮れかけてくると、「明日」帰ってくると言ったのに誰も帰ってこないことに不安を感じた。いったいいつになったら、ここの本当の住人である牧民は帰ってきて、私は知りたい事を知ることができるのか。私は町の住人である子供達相手では思うように知ることができず、遊んでばかりいることに焦りを感じた。

私が「ここには牧民がいらない」と言うと、

チミグは「牧民はいる」と言う。しかし目の前にいるのは町の子供達である。

「もしかすると私をこのゲルに置いていった人達は、私が馬と風景があれば満足するとも思っていて(注7)、私が望んでいる牧民はここに現われないのかもしれない。もし本当にそうならば、私はこの平原を歩いてでも町に行つて私の意図するのはこれではないと交渉しなければならない。」

そこまで考えて私はチミグに、いつ人々は帰ってくるのかと尋ねた。するとチミグは「明日」帰ってくると言う。

もっと詳しく聞いてみると、私は年配の夫婦と一緒に暮らすことになっており、ウシやラクダはいないが、ヤギとヒツジを飼っていてヤギは搾乳できると言う。

私はこれを聞いて安心した。オユンが口にした「明日」からは一日ずれることになるが、チミグは「明日」帰ってくるとははっきり言った。私は1日ずれたことには何か必然的な理由でもあったのだろうと考え、1日ぐらいいは仕方がないと思った。そして、「明日」人々が帰ってくるのならば、私はやっと知りたい事を知ることができると思った。

チミグの話聞くまで、私は子供達からは知りたい事を得られないと思って焦っていたが、子供達とならば言葉なしで楽しみ、互いに共感した場を共有できる。私が知りたいと思っている牧民達と一緒にならば、私は知ることを求めて緊張し続けてそうした場を共有できないかもしれない。そう考えると、「明日」人々が帰ってくるまでは、この状況を楽しもうと思えるようになった。

私がこうして肯定している現状が容易に

覆されるものであることは、この肯定に至るまでの私の考えの移り変わりを見ればわかるだろう。

バットと遊ぶことで共感した場を共有することができたにもかかわらず、やがてその満足感よりも知ることへの焦りがまさって遊ぶことを否定する。そして、町まで交渉に行かなければならないという最悪の事態まで考えてから初めて、チミグに尋ねる。そこでチミグから「明日」と聞いたことで、考えは一気に遊び肯定へと移行する。

そしてこの変遷の翌日になると再び、私は遊び否定へと傾くのである。この目まぐるしい変化を引き起こしているものには、いくつかの要素が考えられる。まず、「マルガーシ」を「明日」と認識している誤解、それから何かを知ることへの囚われ、そして人に尋ねずに一人で考え過ぎているということである。

子供と一緒に遊んでいるという現実を否定する時には、いつもこの3つの要素が絡んでいる。「マルガーシ」についての認識が誤解であることはすでに述べたが、これは時間的制約が私にあることで、いつまでも待つことはできないという焦りを生じさせている。

それから何かを知ることへの囚われは、知るということを自分がそこにいる理由であり目的であると考えていたところから起きている。私は目の前の現実よりも知るということを優先事項として高次に位置づけていた。そのため、知るということの前では現実是否定されても仕方のないものと認識されている。

そして人に尋ねずに一人で考え過ぎてい

ることは、考える事が優先され、人に聞くのが遅れているところから来ている。わからないと思ったらすぐに尋ねればよいのに、行きつく所まで考えてから人に尋ねる。大変非効率的なやり方である。また、人に尋ねるといふ行動を起こさずに、じっと考えているためにマイナスな方向へ考えが行き、何一つ結果を生み出せないまま、焦りだけを助長している。

こうした弊害がまだ私の内に留められていた間はまだ良かった。やがてこれがバット達との関係の悪化に繋がっていく。バットとの関係悪化は馬をめぐって繰り広げられた。

私がいたゲルの持ち主は乗馬用の馬を一頭飼っていた。昼はゲルの側に手綱を前足に巻きつけ動けないようにしておくことで、いつでも乗れる状態にしてある。日が落ち始めると、足に巻いてあった手綱をほどいてゲルから100メートルほど離れた所まで連れて行き、そこで手綱を全てはずし、シュトゥルという縄（注8）を足につける。そして一晩放しておき、翌朝連れに行くのである。

このゲルの住人がいない時でも、その作業は行われた。私とバットはチミグが来る前、馬を連れに行った。この日は馬が肉眼でも見える範囲にいたので、すぐにバットは馬を捕まえ、手綱をつけてシュトゥルを解いた。

それからバットは馬に乗ろうとしたのだが、鞍をつけていない状態であったため、10歳のバットの身長では馬の背に手をのばすのが精一杯であり、一人で乗る事はできなかった。そこで私はバットが乗ろうと

して飛びあがった瞬間にバットの体を支えて押し上げた。そこでバットはやっと馬に乗ることができた。

馬に乗ることのできたバットは私に「乗るか?」と聞いた。私はうなずいて乗ろうとしたが失敗した。私には2人乗りが無理だと思ったのか、バットは馬から降りて、私1人で乗るように言う。私はもう一度挑戦したが乗り方がわからずまた失敗した。バットはそれ以上私に乗ることを勧めず、また彼自身も馬に乗ろうとはせず、そのまま馬を引いて歩いて帰った。

夕方、私は馬にもう一度挑戦しようとして、バットに馬に乗りたいと伝えたと、一人先にゲルの外へ出た。馬の手綱を結んだり解いたりするのは私にはできず、バットに頼むしかなかったため私はバットが出てくるのを待っていた。しかしバットはなかなか出てこず、やっとなでてくると私に「お前は落ちるからマルガーシだ」と言った。

バットは町に住んでいるとはいえ、「牧民」の親戚を持ち、学校のない時は「牧民」の家で暮らすこともあるだろう。バットは私よりも「牧民」に近いのだから「落ちる」と心配する彼の方が、乗りたいと思う私よりも判断として正しいのだろうと私は思った。また、彼は「マルガーシ」と言ったのだから、「明日」には挑戦する事ができるのだろうと思い、今日のところは馬に乗るのを諦めた。

私はここでも、「マルガーシ」について誤解を繰り返しているとともに、更に誤った見解を積み重ねている。私は「牧民」に近いのだからという理由付けを行うことで、私の期待する「牧民」像という恣意的な枠

の中にバットを入れて考えようとしたのである。

ここで言う「牧民」とは、私の知るというこの対象であり、この地での生活に詳しく、私よりも正しい判断を下せる者のことである。そのため「牧民」であることは私の判断よりも優先される者を意味し、見習うべき対象である。

私はこの「牧民」に近からいという理由づけでバットの言葉を正当化したが、バットは私に「落ちるから乗るな」と言っただけである。この言葉は「牧民」でなくても口にできる。例えば、馬についてまったく詳しくない者が相手を馬に乗せたくないがために口にすることもできる。「牧民」であったとしても、正当な理由によってこの言葉を口にすることは限らない。「牧民」だからと理由づけることでは言葉の信憑性を証明できないばかりか、正当な理由が存在する事すら危ぶまれる。つまり、バットが「牧民」である必要もなければ、その言葉が正しいものである必要もないのである。

そうしてみると、私がバットの言葉を正当化しようとし、それを「牧民」に結び付けようとしたことがいかに恣意的なものであるかが見えてくるだろう。

バットは10歳の少年であり、人間である以上失敗も犯す。私の「牧民」という分類はそういうバットに対して過剰な期待とでも言うべき物であった。そしてバットを信用するために利用された「牧民」という分類は、バットがその分類の枠からはみ出すと、彼への不信を強化するものとして働いていった。

バットに「落ちるから乗るな」と言われ

た翌朝、私とバットは馬を探しに出かけた。しかし、馬は双眼鏡で見渡してもどこにも見当たらなかった。はじめは馬の足跡を辿って行ったが、途中で見失ってしまい、適当に歩いては双眼鏡を使って探した。

30分ほどして、双眼鏡で南の方に茶色い点を見つけた。ほとんど動かないのだが時々折微妙に動いていた。私はあれではないかとバットに告げた。しかし、バットはちらっと見ただけであれは違うと言って、それとは正反対の北の方へ歩いて行った。バットが北を選んだのは、その方角に動いているものが見えた為かもしれなかったが、それはすぐにラクダと判明した。バットはそれでも北へと当てもなく歩いて行った。

バットは馬を探そうとせずに下を見ながら歩いて石を拾ったり、よく座り込んで休憩した。当てもなく歩いているバットに、私は何度も南をバットに指差したが、彼はそれを信じなかった。

結局私達は馬探しに失敗し、昼過ぎにチミグと一緒に再び馬探しに出た。チミグは馬がいる方向を見定めているのが、一定の方向に向かって歩いて行った。その方向は私がバットに指差した方向であった。そして一時間もしないうちに私達は馬を捕まえた。

私は自分が南だと思っていたことが正しかったことを知ると、それをなんの根拠もなく否定したバットの言動に不信感を覚えた。そして、前日にバットを「牧民」に近いからと理由づけることで、馬に挑戦することを諦めたのは間違っていたかもしれないと思った。そういえば、バットは「牧民」らしからぬ行動をとっていたことを私は思

い出した。

バットは水が貴重なこのゲルで、水を大切にしているとは思えない行動をとっていた。日中は非常に暑いため、バットは頻繁に水タンクからひしゃくで水を汲むと頭からかぶっていた。バットの住む町には水道がきているため、彼の水浴びも彼の家ではなんらおかしいことでない。しかし、ここでは水は遠くの井戸から汲んで運んできたものである。バットはこの水の貴重さを理解していなかった。

当時の私はどこからこの水が運ばれてきたのかを知らなかったが、ゲルのそばにある水の入った大きなタンクの中身が、バットの水あびによって見る見るなくなっていくのを見ていた。人々が帰ってくる前にこの水タンクが空になってしまったらどうなるのだろうかとは私は不安に思うと同時に、水の減少に無頓着なバットは「牧民」らしくないと思い苛立ちを覚えた。

バットが誤った判断を下していたことで、私はバットに不信感を持ち、更に「牧民」という分類にあてはまらないとすることでその不信感を一層強化した。

バットの水浴びについて、彼の家ではなんらおかしい行動でないとしながらも、それが彼への不信感へと繋がるのは、そこに「牧民」に近いかどうかという分類が存在しているからである。この分類がなければ、私は彼の水浴びは水を粗末に扱ってはいることを非難はしても、彼を信用できないと思ひ込む事はなかったはずである。

馬探しにおいてバットが誤った判断を下したことも、「牧民」らしいかどうかという分類がなければ、子供だから仕方がないと

結論づけられたかもしれないのである。

はじめは「牧民」に近いからだと言うことで、バットの言動を信用しようとしたにも関わらず、どうも信用ならないとなると、「牧民」らしくないからだと判断した。ここでは「牧民」に近いという分類が、バットへの過剰な期待となり、その反動として期待の裏切りであるバットの失敗に苛立ちを覚えている。自分で設定した枠に自分が囚われてしまっているのである。

私の設定した恣意的な枠が仇となり、状況は悪化してしまった。バットを「牧民」らしくないと判断したことで、ここから私はバットとの間に遊びではない、現実の対立関係を築いていった。

夕方、私は馬を目の前にして、もう一度馬に乗りたいとバットに告げた。バットは再び「オーチン（落ちる）」「マルガーシ」と口にし、馬を動かさないようにその足に手綱を結びつけた。

「落ちる」について、私には不満があった。私が乗ることに失敗したのは、乗馬初挑戦の時であり、その時はどうやって乗ったらいいのかを知らなかった。しかしその後、馬飼いの牧民が馬に乗る姿を見てコツが分かったので、次の挑戦では必ず成功する自信が私にはあった。そのためバットの必ず落ちるかのような言い方に、納得がいかなかった。

バットは「明日」と言っていたことを実行せずに、再び「明日」だと言う。理由は昨日と同じ「落ちるから」というものであった。1日延期することに特別な根拠や理由はなく、ただ実行することを避けようとして同じ言葉を繰り返しているように思え

た。もし、次の「明日」がやってきても、バットは再び「明日」と言うだろう。バットの言葉はただの嘘なのだと私は思った。

私はこの日高まったバットへの不信と、挑戦させてくれないことへの不満を、私は怒るという形でバットに向けた。バットは何がしかをモンゴル語で言い続けたが、きっと同じ言葉の繰り返しであろうからと私は判断して耳をかさず、日本語、モンゴル語、英語入り交じりで、私は言いたいことをまくしたてた。

バットが私の剣幕に圧倒されているところに、騒ぎを聞きつけたチミグがゲルから出て来た。チミグは私に「乗れ、乗れ」と言った。私はそこで馬の背に両手をのせ、ジャンプしてその背に乗った。成功である。私はそのまま馬に乗って歩き出した。

バットとチミグは一旦ゲルに戻ったが、バットはすぐに出て来てヒューと口笛を吹いた。戻ってこいという合図だ。私は成功したところを見せれば十分であったので、すぐにゲルの方へ戻った。バットに私は落ちなかっただと確認して言うと、バットは苦笑した。

バットが馬の足に手綱を結びつけて動けないようにすると、私達はゲルに戻った。するとバットは私に「オーチン（落ちる）」から乗るなと言った。さっき成功して落ちないところを見せたではないか。そう思いながらも、落ち着いて「ヤーガードゥ？（どうして？）ピチヌー？（書いて下さい）」と私は言った。

「モルノース オーチン エツン ナマー ク ザクネン」お前が馬から落ちたら僕が怒られるぐらいの意味であった。2度目の挑



戦で馬から落ちなかったのをバットも見たはずであるのに、どうしてバットが落ちるから駄目だと言いつづけるのか私には納得が行かず、不信の目をバットに向けていた。

ここでは「マルガーシ」についての誤解がついに「嘘」と判断され、怒りにいたるという最終局面に至っている。「どうして？」と尋ねることも対立の最終局面において行われており、前述したような尋ねないことによる弊害を存分に発揮していると言える。この最悪の事態において、私は自分の考えを明らかに相手に押し付けている。

バットが「お前が落ちたら自分が怒られる」と書いたことは、私が2度目の挑戦で成功したとしても、落ちる可能性がある以上、バットは私を馬に乗せるわけには行かないことを意味している。それは当時の私の立場からすれば、もう落ちないのであるから不当な理由であるが、バットの立場からすれば、必然的な理由である。前述したようなバットの馬探し失敗や水浴びについても同じことが言える。

このことは安易に、相手の立場で考えることを推進するものではない。相手の枠を想定することは、また別の囚われを生み出すことになるかもしれない。問題なのは私が枠に囚われていたということである。

馬に挑戦したいとはまさに主観的なものであるが、これは最終局面に至るまでは、様々な理由付けによって押さえられていた。それがはっきりと表面化するに至った要因には、その理由付けを恣意的な枠で行い、やがて私自身がその枠に囚われてしまったことが考えられる。

「マルガーシ」については、知るという

ことを優先事項とする枠に囚われて焦りを感じ、馬については、「牧民」という枠を設定したことが不信を助長した。どちらもマイナスなものを多く生じさせており、そのマイナスの極致として前述の最終局面がある。

私はバットと数日間同じ空間と時間を共有したのだが、そこに通じ合っているような共感した場が生じていたのは、バットと私とが遊びで対立関係を装っていた時だった。それは恣意的な枠を持ち出す以前のことである。チミグは遊ぶ私達を見てよく笑っていた。

#### 2 - 4 チェデウ（注9）

チェデウは毎日ヤギの搾乳をし、その度に大体 1.2 リットルの乳を集めていたが、私は何頭のヤギを搾乳すればその量になるのか知らなかった。そこで私は日没後の搾乳の時、チェデウの搾乳頭数を数えることにした。

夕方、かまどで3日前に屠ったヤギの頭や干し肉が茹でられていた。それがやっと茹で上がり、これから食事だというところで、チェデウはミルクバケツを持ってゲルを出た。それからゲルのすぐ北側に群れている家畜のところへ行くとヤギの搾乳を始めた。

私は搾乳頭数を数えようと決めていたので、肉を食べずにチェデウの後にゲルを出た。するとチェデウはゲルを出てきた私に戻って肉を食べるようにと言った。チェデウは丁度肉が茹で上がったところなのだから、食べてこいと言っているようだった。

しかし私は搾乳頭数を知りたかった。そこで私は搾乳が見たいのだという意思をチェデウに伝えようとした。食べてこいというチェデウに対して首を横に振り、搾乳しているチェデウや群を指差し、搾乳するジェスチャーや、「ウズフ（見る）」と言って見るジェスチャーをした。

そういう私に対して、チェデウは何度もゲルに戻って肉を食べるように言い続けた。その度に私は見たいという意思を伝えるための動作をして、チェデウのそばを離れなかった。

何回目かに、チェデウは私をゲルに戻すことを諦め、なげやりな調子で私に群から離れている家畜を集めるようにと指示をした（注10）。

私はチェデウに言われた仕事をするため、群の端の方を歩いた。チェデウから離れた所を歩きながらも、チェデウが搾乳頭数を数えつづけた。そして、チェデウが35頭目の搾乳を終えてゲルへと帰ると、私もゲルへ戻った。

私がゲルに戻るとチェデウはずっとバボーの方を向いて、不機嫌な低く苛立った声で話をしていた。チェデウが何度言っても、私が帰らなかったことについて話しているようだった。

私は知りたいと思ったことを実行しただけであるのに、チェデウが苛立つ理由がわからなかった。また、チェデウにゲルに戻って食事をしておいでと言われた時、急いで今食べなくても遅れてチェデウと一緒に食べれば良いと思っていた。そのため、すぐに食べなかったからといってチェデウが腹を立てているのが私には理解できなかつ

た。

当時の私はチェデウのそばにいて、搾乳を見たいという意志をジェスチャーしていたが、この意志はチェデウに伝わっていたのだろうか。私がある場にいる本当の目的は搾乳頭数を数えるということである。しかし、それをモンゴル語やジェスチャーで伝えることができないため、私は搾乳を見たいという説明の仕方をした。この説明をチェデウは理解したかもしれないが、この説明では彼女にとって不十分であったかもしれない。

私は毎日チェデウの搾乳作業を見ており、搾乳を手伝うこともあったが労働力としては役に立たなかった。チェデウはそのことを知っているから、搾乳を見たいと言う私に対して、今回くらい搾乳を見なくてもいいではないかと思ったかもしれない。つまり、私の言っていることは分かっても、どうしてそれに拘るのかを理解できなかったのではないかということである。

では、私が本当の目的を伝えることができたと仮定したら、チェデウは私の言うことを理解してくれただろうか。私の目的は搾乳頭数を数えるというものであった。それはチェデウが搾乳する時ならば、いつでもできることであり翌日に延期することもできた。

この時でなければならぬ必然性があったとすれば、搾乳頭数を数えることを思い立ったのがこの日の昼であったから、思い立ったことを早く実行したかったということがある。しかし早く実行したいというのは私の欲求でしかなく、他者に対しては必ずしも通用する理由ではない。

チェデウが私にゲルに戻って食事をするようにと言ったことは、当時の私にはわからなかったが、私の為の言葉である。私がそばにいない方がチェデウにとって都合がよかったのだと想定しても、この言葉の対象が私に向けられていることに変わりはない。それに対して私の言ったことは自分の欲求を伝えるだけの言葉である。

もし、私がモンゴル語を話せたならば、チェデウに直接搾乳頭数を尋ねることもできただろう。そこでチェデウが言った頭数と、私が自分で数えた頭数とが食い違っていれば、そこから学びとれるものがあったかもしれない。

しかしそうしたことはあり得ず、私の搾乳頭数を数えるという行動は、私、もしくはモンゴルの外の人間に向けられたものであった。数えることによって得た情報は私や外部の人間が搾乳について理解し、モンゴルについて理解する一端にはなるが、チェデウを理解する為のものではない。

当時の私はそのことに気づかず、知るということを優先事項としており、自らの欲求に盲目であった。食事を遅れてとってモよいだろうと判断しているのは、私であってそれは他の人間には必ずしも通用しない。チェデウが私に食事をするように言った時、チェデウは暖かい内に食べるのが良いだろうと判断してそう言ったのかもしれない。

私とチェデウの判断は違っていた。当時の私にはそこに違いがあることを、チェデウを理解しようとしていなかった。そのためにチェデウの怒りの理由も理解できなかった。しかしこの状況は持続しなかった。

翌朝、チェデウはまだ不機嫌だった。チ

ェデウがヤギの搾乳に向かうと、後から私もついて行ったが、私にはチェデウが避けて動いているように見えた。私はその場にいることが受け入れられていないと感じると、その場を立ち去った。

食事を取り終わると、チェデウとパポーは乳製品作りのために重石を探しに出かけた。すると、私の使った茶碗だけが片づけられていなかった。いつもならば、2人の茶碗と一緒にいつのまにか片づけられているものだった。私は自分のことは自分でやれということだと思い、いつも2人がやっているような方法で茶碗を洗い、片づけた。

私の茶碗を2人が片づけているということは、私を客として扱っていることを意味している。私に対して、客としての距離を置き、気を使っているということである。それが自分のことを自分でやらせるという自立を促す対応に変化することは、客として扱われている限りは生じ得なかった彼らの本心の様なものが、私にはっきりと明示されたのだと考えることができる。

当事の私はチェデウを苛立たせることによって、彼らの本心の様なものを知ったのを皮肉に思った。本来ならば相手が私を受け入れた時に知るものであろう。それが逆に私を受け入れきれないという怒りによって生じている。

私は相手を苛立たせてしまったことを知るという視点で考えているが、その視点だけでは知るという優先事項を揺るぎ無いものと認識したままである。認識は閉じた世界の中にある。

認識は知るという世界にとどまっても、その場に存在している私は行動を変化

させざるを得ない状況であった。朝の搾乳の場から、私が立ち去ったように、相手が受け入れてくれないければ、私は知ることはおろか、その場にいることもできない。

その場にいられるために何をすべきか。その時、茶碗が残されていたといことは重要な意味を帯びてくる。彼らが自分のことは自分でやれとしたこと、それは見ているだけの私から変化しろということでもあった。

私は彼らの茶碗の片づけ方も見て知っていたが、自分ですることはなかった。私は見ているばかりで何もしなかったのである。茶碗が残されていたことは、この私を否定するものであった。

私はここにおいて知るための行動であった見るということに留まるのを止め、自分のできることで自分でやり、相手の作業に少しでも参加していく必要があった。私はチェデウの怒りを媒介として、自らの行動の歪みに気づき始めていたのである。

重石探しに行った2人は30分もすると帰ってきた。帰って来たチェデウは私に笑顔で話し掛け、冗談も飛ばすほどすっかり機嫌が良くなっていた。チェデウの機嫌を直したきっかけが何であったかはわからなかったが、出かける前とこうも一変するものかと私は戸惑った。

私は彼らの作業に参加していく必要性を感じてはいたが、相手が受け入れてくれない限り、私は何度でも朝の搾乳場面の様などころから立ち去っただろう。相手に関わっていくが必要とされていても、それを実行できるか否かは相手にかかっていた。

チェデウの機嫌の一変に私は戸惑いこそ

したものの、これに救われてもいたのである。私はここから相手に関わっていくことを始め直したとも言える。

## 2 - 5 「イイムウ？イイムウ？」

私がバポー、チェデウと生活していた時、何度か彼らの孫達が遊びに来た。彼ら子供達と遊んでいると、彼らは頻繁に「イイムウ？イイムウ？」と私に尋ねた。尋ねる対象は物であることもあったが、主に人であった。

モンゴルでは親指が「善い」を表し、小指が「悪い」を表す。このことから、親指と小指を交互に出して見せながら「イイムウ？イイムウ？」と言い、「善いか？悪いか？」尋ね、相手に判断させて遊ぶのである。

この「イイムウ？」という遊びを始めたのは、ゲルデー（注11）であった。

はじめてゲルデーに会った時、彼女は自分や周囲にいる子供たちを指差してはその名前を尋ねた。私が間違える正しい名前を教え、正解の時はゲルデーも周囲の子も嬉しそうに笑った。

他にも色々なことをゲルデーはモンゴル語で私に教え、話をした。私は彼女の教えてくれる言葉を復唱したが、私には彼女が話していることができないことも多々あった。しかし、ゲルデーが一生懸命話しているので、私はそれを彼女には伝えることはせず、そこに通じあっているような場が生じているのを保持した。

別の日、再びゲルデーに会った時、彼女は以前と同じように何度か名前を尋ねてい

たが、そのうち「イムウ？イムウ？」と尋ねるようになった。特に自分のことを指差しながら言った。そうした彼女に私が親指を突き出して（善いという意味）こうだよと大きくうなずいてみせると大喜びで、周囲の子供に自慢しているようであった。すると周りの子供も私はどうだと次々に尋ねてきた。そこで私が一人一人にまた親指を突き出してうなずいてみせると皆が大喜びであった。

子供達は「善い」とされることを非常に喜び、何度でも言われたがる。それでは逆の「悪い」とされた場合はどうであろうか。

私は悪戯をした13歳のチンゲ（注12）に対して、他の子供達には皆親指を出し、彼に対してだけ小指を出して顔をしかめてみた。するとチンゲは納得がいかないように続けて何度も「イムウ？イムウ？」と私に尋ねた。その度に私は小指を突き出した。

彼は続けて言っても無駄であることを知ると、時間を置いてから尋ねたり、他の人について言わせた後に自分について尋ねたりした。しかし私は小指を出し続けた。するとチンゲは私に対して腹を立てるでもなく、すっかり意気消沈してしまった。私が少し行き過ぎたことを反省して、他の子供達に親指を出していた時に、チンゲにも親指を出すと、彼はやっと笑顔を見せた。

「悪い」と小指を立て続ける私に対して、チンゲは様々な方法をとったが、それは私が「善い」と言うのを待つものであった。チンゲは何故なのかと理由を尋ねたかもしれないが、私は彼の漏らした言葉はわからなかった。私は彼の行動によってしか考え

ることができなかつたし、彼は私の判断が変わるのを待つしかなかった。

それでも、私とチンゲとの間に対立が生じていないのは、何故だろうか。チンゲが「悪い」とされることに納得が行かない理由として、自分1人が「悪い」とされ、その根拠もわからないということが考えられるが、これだけならば、対立が生じてもおかしくない。根拠のない批判に対して反発するのは自然な成り行きだからである。それでは、何故それが生じなかったのか。

チンゲが納得行かなかった理由としても一つ考えられる。それは「イムウ？」という遊びにおいて、「悪い」とすることは楽しくない遊び方だからというものである。「善い」とすることは互いにとって楽しい遊び方である。しかし、「悪い」とすることでは、周囲の者は面白がるかもしれないが、言われた本人にとっては楽しくない。

楽しくないとは言っても、これは遊びである。ここで「悪い」とされたことに真剣に腹を立てていたのでは、遊び心が足りないのである。だからこそ、チンゲは私に対して対立姿勢をとるでもなく、私が「善い」と言うのを待ち続けたのだろう。

私はチンゲに「悪い」と言ったが、私にとってもそれは真剣なものではなく、遊びであった。私は子供達に「善い」「悪い」を判断してみせたが、それは遊びであり、根拠が存在する必要はなかった。

私は子供達が喜ぶから「善い」と言っていた。子供達も私に厳密な判断を求めているのではなく、私という存在から「善い」と子供達自身が判断されることを楽しんでいた。つまり、互いに楽しむために「イイ

ムウ？」を利用していただけなのである。「イイムウ？」は遊びであった。そこには根拠なしに通じ合っているような、共感した場が生じていた。

## 2 - 6 石探し

パボーとチェデウとの生活も終わりに近づいた頃、私はよく石探しに出かけていた。私の生活していた一帯はゴビ地帯であり、赤、緑、黄色など様々な色の石が転がっていた。私はそうした石の中から手頃なものを探し、思い出に持ち帰ろうとしていたのである。

思い出に持ち帰るのであるから、特徴のあるものを探していた。まず、特徴的なのは先に述べたように、その色であった。それから形である。砂漠性ステップであるため、たえず石は風化にされされ、風に飛ばされて移動している。そのため他の石との衝突の跡のあるものや、ひびが入っていて次の衝突では確実に砕けそうなものなどがあった。私はその特徴的な形や色の石を探しては持ち帰った。

ある日、私が一時間くらい散歩ついでに石探しに行き帰ってくると、チェデウが何をしていたのかと聞いた。それで私は手に持っていた石をチェデウに見せた。

チェデウはその一つ一つを見ると笑いながら「モー バイナー」と言った。ダメな石ころだねえくらいの意味である。そうして、ゲルの端にあった小さな袋を持って来てその中身を出した。たくさんの小さな石だった。チェデウは子供達が拾ってきたのだよと言いながら私に一つ一つ渡して見せてく

れた。

石の多くは白いものや透明なもの、きらきら光るものなどで、どれもきれいなものだった。それに比べると私は好んで暗い色の石を選んで持って来ていたので、彼女からするとダメな石なのかもしれない。

その2日後、私達は家から歩いて約40分のところにある、トゥブシンのゲルに来ていた。

皆のんびりとして帰る様子もないので、私はまた散歩に出た。人の家に来ているので早めに帰ろうと思っていたのだが、トゥブシンのゲル周辺はパボーのゲル周辺とは違い、主に黒っぽい石ばかりが転がっていた。いったいこれはどうしたことだと歩き回っているうちにすっかり時間がたってしまい、戻ってきたのは30分以上も後のことだった。

私が帰ると、チェデウ達は怒るでもなく、何をしていたのかと言った。それで私は拾ってきた黒い石を見せた。するとチェデウは困ったものだという感じで笑うと、「この子はまたこんな石を拾ってきたのだよ」とみんなに言った。チェデウがみんなに石を見せてまわると、みんなダメな石だねえと笑っていた。

その翌日も私が同じことをやっていると、チェデウは「こんな石どこにでもあるのだよ」と笑って言った。そして、「こういう石がいい石なのだよ」と言うと、ゲルの端っこのダンボールにしまっていた、白くきれいな石や奇妙な形の珍しい石を見せてくれた。私は確かにきれいだねとうなずいた。

この日はチェデウ達の孫もいて、私達のこのやり取りを見て、子供達は外に行っ

石を拾って来てはきれいな石はこういうものなのだよと見せてくれた。どんどんこれもきれいだと、これもきれいだと持って来てくれるのであつという間にたくさんの石が集まってしまった。子供達はそれを持っていけ持っていけと言った。つまり、日本に持って帰れというのである。私は子供達にお礼を言うと、その内のいくつかを持って帰った。

どんな石がいい石かに関して、私と彼らの価値観は違っていた。私は確かにチェデウが言うようにこの土地のどこにでもあるような石を拾ってきたが、それはこの土地ならではのものを求めていた私にはいい石であった。しかしチェデウ達にしてみれば、それは珍しいものでもなんでもないから、ダメな石であった。

ここでは互いの価値観が異なっていることによってすれ違いが生じることがなく、互いが異なっているというまさにそのことによってその場に笑いが生じている。「またこの子はダメな石を拾ってきたよ」とチェデウが笑う時、そこには彼らの価値観にとってダメな私に対する親近感が生じている。

笑い、笑われることで私と彼らとの間に通じ合っているような共感した場が生じているのである。

### 第3章 考察

事例1では、目の前にいる人間に関わって何かを共有するのではなく、相手文化の言葉を求めるという概念的次元にとどまっていた為にすれ違いが生じていた。事例2

では、兄が私に関わろうとしたにもかかわらず、私が「知る」ということを持ち出した為にすれ違いが生じた。この事例2の「知る」という立場は、事例1における概念的次元にとどまるということと同義である。目の前の人間ではなく、その向こうにある文化を見ている。

この、目の前の人間に関わることもよりその向こう側を見つめる立場は、事例3において最終局面をもたらした。互いが笑い、通じ合っているような、共感した場が生じていたのを、恣意的な枠に囚われて打ち壊した。事例2においても、私の「知る」という立場はその場を壊したのかもしれないが、事例3ほど破局的ではなかった。

事例3において、私はバット達と共感した場を共有することは楽しいことではあっても、「知る」ことはできないとして共感した場を否定した。

遊ぶことで生じた共感した場は、笑いがおさまると同時に消えていく。消えればまた再構成し直し、場はまた生じるがやがてまた消える。私には同じことの繰り返しで変化が見られず、そこから何かを得るといった展望は見えなかった。

共感した場は時間的・空間的制約の中にある。一方、「知る」ことで得たものはそうした枠を超え、様々なことに援用できるもののように私には思われた。「知る」ことで得た情報はその項目を増やせば増やす程、有益なものとなるが、共感した場は積み重ねても得るものは少ない。「知る」ことが有益で、笑い、笑われる共感した場は有益とは言えないとする価値判断がここでは生じていた。

この価値判断を持ち出す以前、私は共感した場が生じたことを素直に喜んでいた。バット達とコミュニケーションが上手く取れるかどうかが問題であり、バット達との関係が優先事項だったのである。

私とバット達とはあまり言葉の通じない異質な者同士である。そこで笑い、笑われる共感した場が生じると、異質性ゆえの大きな隔たりが少し縮められた様に思われた。遊びによって笑いが生じ、笑いが生じたということによって互いが通じ合えたような満足感があったのである。

私はバット達との関係において、笑いのある共感した場を積み重ねても何も変わらないと判断し、「知る」ことを選んだ。しかし、笑いを排除したからといってそこに展望が開けたわけではない。

異質な相手に対して積極的に関わり続けることは、わからないという緊張や不安を持ちながらもそれに打ち勝って関わるという、非常にエネルギーを要することである。笑いを排除することはこのエネルギーを失ったに等しく、人に関わっていくとするコミュニケーションを排除したのだとも言える。

コミュニケーションを取ることよりも「知る」ということを優先することは、異質な者に関わることから自らの馴染んだ世界に後退したのだと言うこともできる。馴染んだ世界ならば小エネルギーで済む。自らの世界に閉じ、相手の存在を自らの良い様に意味付ける。自らの価値判断で相手を解釈し、異質なものは否定することで排除する。

私が自らの世界に閉じてしまうことは、

バット達側から見れば私の異質性が増大することを意味する。異質な者同士が通じ合うために必要なコミュニケーションが私の方から一方的に遮断されている以上、バット達は自分の思考回路で動いている私を理解する術もない。そこでコミュニケーションの齟齬が起き、摩擦が生じるのも必然と言えるかもしれない。

ただ、事例3と異なり、事例4ではその摩擦が私を再び異質な者とのコミュニケーションへ引き戻した。私は摩擦によって「知る」ことの弊害に気づき、彼らに関わって行くことを決めたのである。それまで「知る」ということの為に見ること、そして真似することを重点においていたが、あくまで「知る」為の真似事であり、彼らの生活に組み込まれてはいなかった。彼らの生活の中で何らかの役割を果たしたり、彼らに関わっていくということを行わず、「知る」ということを行うだけで私はそこにいて良いのだと思っていたのである。

しかし、事例4におけるチェデウはそれを否定した。「知る」ということが存在意義として成立するのは私に対してのみであり、相手にはそれは通用しない。そこにいることを承認してもらう為には、彼らの生活の中で自らのできそうな役割は積極的に担っていくことであり、「知る」ことではなく関わっていくことなのだとは私は知ったのである。

事例5においては「知る」ということを少し持ち出したものの、そこに事例4の摩擦以前に見られたような「知らなければならぬ」という焦燥感はなかった。あくまで「イイムウ？」という遊びに重点を置き



ている。

ところで、私はこの「イムウ？」を当時「イーモー？」と思っていた。「悪い」をモンゴル語で「モー」と言い、小指を立てることは「モー」を意味する。そこで知らない単語である「イー」を「善い」であろうと私は類推し、「イーモー？」で直接的に「善いか？悪いか？」を尋ねていると思ったのである。

しかし、後にモンゴル人に聞いたところによると、それは「イムウ？」もしくは「イムウ？タイムウ？」ではないかということであった。「イム」は「このように、このような」という意味で、質問文の時に「UU(ウウ)」をつけて「IIMUU(イムウ)？」となる。また、「タイム」は「はい、そうです、そのような」という意味で、これも質問の時に「UU(ウウ)」をつけて「TIIMUU(タイムウ)？」となる。比較をする際に「イムウ、タイムウ」と一緒に使うのだという。

「イムウ？イムウ？」にしる、「イムウ？タイムウ？」にしる、「このような」とか「そのような」という指示代名詞である。私が想定した直接的な「善い？悪い？」という表現からすると、指している事象は同じだとしても、そこにあるニュアンスは違ってくる。

これも一種の誤解であるが、この誤解から何かが引き起こされるということはなかった。事例3においては誤解が焦燥感を強め最終局面を迎えた。事例5の誤解はどうして放置され得たのだろうか。

もちろん事例5は遊びにおける他愛の無い誤解であったということもある。しか

し事例3における誤解も私が焦りさえしなければ、問題は起きなかったかもしれないのである。事例3には焦燥感があり、事例5にはそれがない。本稿での事例はほとんど時系列的に並んでおり、事例3と事例5の間には事例4があった。

つまり、前述したように事例4において異質な者に関わっていきこうと態度変容をしたことが、事例5、更には事例6のような状況を生み出したのである。

事例6において、私は自らの異質性をさらけ出しているが、それは相手を「知る」ためだ等という押し付けではなく、素の自分である。チェデウ達から「だめな石ころだね」と言われれば、そう言う彼らの判断はそのまま肯定しつつも、自分は自分という立場で私は「だめな石ころ」を拾い続けた。そしてチェデウ達は互いの価値観の違いを笑った。私も「だめな石ころ」と言われることを笑った。

私はモンゴルの牧民をわかろうとして「知る」ということを持ち出したが、それは相手を意識し過ぎた観念であり、私はそれに囚われ緊張し、焦燥感に見まわれ、コミュニケーションの齟齬を引き起こした。

事例6においてはそうしたものが解消されている。異質な者に関わるという不安や緊張が薄れることで、相手の判断、自らの判断を共に受け入れる余裕ができていく。そしてそこには笑いがある。笑いは言葉のあまり通じない状況において、前言語的コミュニケーションとして、非常に重要なものである。本稿の事例は言葉のあまり通じない状況である。その中で異質な者同士が通じ合えたような印象を覚える共感した場

が生じる時には、いつも微笑みなり、笑いなりがあった。

私は日本人であり、これまで生きてきた間に身につけてきた習慣等を無意識の内に行うこともあるだろう。その異質性が相手とのコミュニケーションを排除したものであってはならないが、それが笑いに還元されることもあるということは認識しておくべきであろう。相手に何かを押し付けるといことがないよう緊張感を持つことと同時に、目前にあるありのままを受け入れる余裕とエネルギーと失わないことが肝要であろう。

モンゴル人が客好きであることについて第1章で触れたが、それは世話好きという意味ではない。人間が好きでコミュニケーションをとることは好んでも、相手に何かを押し付けはしない。バボー・チェデウ夫妻の家にいた時も、ブルネイ・センク夫妻の家にいた時も、彼らは私が好きなようにやることができるよう放任していた。彼らは何かを私に与えたりさせたりせず、やりたいのならば自分でやればいいという風であった。そのおかげで私には自由にできる時間が十分にあった。

フィールドによってはフィールドの人間側が異質な者と関わるエネルギーに満ちており、フィールドワーカーがそれに圧倒されることもあるかと思う。そう考えると、私が「知る」ということを押し付けた為に摩擦を引き起こしたことも、「だめな石ころ」を拾い続けることができたのも、ひとえにモンゴルというフィールドであったためと思われる。モンゴルの人々の異質な者との距離が余裕を持って設定されていたた

めに、その隙間で私は揺れ動いたのである。

しかしその余裕があったおかげで私は本稿で見てきた様に知らなかったことを知ることができたのである。モンゴルの様なフィールドに入る者に対しては何が肝要であるかを既に述べたが、フィールドでの体験に圧倒されるフィールドワーカーであっても、場を笑えるような余裕を失うべきではないだろう。

#### 謝辞

本稿を作成するにあたって、たくさんの方々にお世話になるとともに多大なご迷惑をおかけしました。

まず、島村一平氏にはモンゴルに行くことを現実のものとしてくださり、お忙しい中、モンゴルへの連絡や準備についてお世話をしてくださいました。ありがとうございました。

風戸真理さんには島村さんを紹介して頂き、モンゴルに行くきっかけを与えてくださいました。

島村氏の妻オドンチメグさんにはウランバートルでは大変お世話になり、私の起こしたトラブルについての真実と誤解について気づかせてくださいました。

モンゴルではオドンチメグさんの御両親、センクさん、ブルネイさんに本当に何から何までお世話になりました。

バボーさん、チェデウさんにはゲルでの滞在を許してくださり、色々とお世話になりました。ありがとうございました。

ブルネイさんのお兄さん、オユンバット

君、ヒメーさん、オユンさんなどウムヌ・ゴビの方々には本当にご迷惑をおかけしました。

以上の方々には、私がトラブルを引き起こしたことで多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、お世話して下さったことに深い感謝の念を表したいと思います。

最後に、私の指導教官である文学部の竹川大介助教授には、独自性を尊重した厳しい御指導を頂きました。お忙しい中、遅々として論文作成の進まない私に、書きたいものを書かせてくださいました。先生のものでなければ、この論文は日の目をみる事がなかったでしょう。

また、ゼミ生の重森さん、原田さん、山本さんには本稿に貴重な意見と批判を頂きました。

先生、それからゼミの皆さんありがとうございました。

## 文献

青木信治編、1993 『変革下のモンゴル国経済』 アジア経済研究所

伊奈正人、1997 『若者文化のフィールドワーク もう一つの地域文化を求めて』 勁草書房

梅棹忠男、1990 『梅棹忠男著作集 第2巻』 中央公論社

鯉淵信一、1992 『騎馬民族の心 モンゴルの草原から』 日本放送出版協会

小長谷有紀、1991 『モンゴルの春』 東京河出書房新社

小長谷有紀、1996 『モンゴル草原の生活世界』 朝日新聞社

小貫雅男、1993 『世界現代史4 モンゴル現代史』 山川出版社

司馬遼太郎、1974 『街道をゆく五 モンゴル紀行』 朝日新聞社

谷泰編、1997 『コミュニケーションの自然誌』 新曜社

蓮見治雄、1993 「文化・芸術・風俗」『モンゴル入門』 日本・モンゴル友好協会編 三省堂 pp.110～pp.151

吉田順一、1993 「歴史と風土」『モンゴル入門』 日本・モンゴル友好協会編 三省堂 pp.2～pp.51

P. ラビノー；井上順孝訳、1980 『異文化の理解 モロッコのフィールドワークから』 岩波書店